神の子と人の娘

（神学的ではあっても神学ではない話）

2025/9/2
佐々木正明

創世記の第6章の冒頭の部分に、何ともおかしな、まさに理解不能な記述があります。そしてそれは人類の滅亡に近い、ノアの大洪水の物語への、導入の役割を果たしているように思われます。先ず創世記の第6章を読んでみてください。理解不能というのは、第2節、「神の子らは、人の娘たちが、いかにも美しいのを見て、その中から好きな者たちを選んで、自分たちの妻とした」という記述です。

この不可解な記述については、昔から多くの人たちが頭をかしげ、おおむね二つの見解に到着しています。 第一の見解は、「神の子とは天使たちのことで、人の娘とは私たち人間の娘である」というものです。 第二の見解は、「神の子とは、正しい家系と思われるセツの子孫たちであり、ひとの娘たちとは、悪に染まっていたカインの子孫たちである」というものです。でも、これらの見解にはどうしても納得できないところがあります。第一の見解に対しては、肉体を持たない天使が、どうして人間の娘たちとの間に、子をもうけることが出来たかという、非常に難しい問題を解決しなければなりません。第二の見解についても、セツの家系だって初めから罪の内にいたのだから、罪の大小はあったとしても、カインの子孫たちと同じ罪人であったのには変わりがない。それを神がことさら問題視するのは、理屈に合わないという困難さが伴います。

変わり者であることを自ら認める私、佐々木牧師は、以前から、ここには人間にはわからない、重大な出来事あったのだと、興味を持ち続けていました。バイブル・カレッジであったか神学校の教室であったか、随分前のことで、記憶がはっきりしないのですが、このことが話題になったとき、私はネアンデルタール人との雑婚という、とんでもない第三の見解を持ち出して、みんなに「それはないよ」と笑われたものです。その頃、どういうわけかネアンデルタール人のことが、一般のメディアで、かなりの話題になっていたからです。私は歴史的に、ホモサピエンスと呼ばれる現代の人類と、ネアンデルタール人と呼ばれるホモサピエンスには属さない古代の人類との間に、雑婚の可能性があるのではないかと、何となく考えていたのです。

ところが今世紀に入って 10 年ほど、大変な生物学的発見が話題になりました。それは現代の私たち人類の中に、僅かながら、ネアンデルタール人の DNA が混入していると

いう、まさに、びっくりの発表でした。ゲノムの研究がますます盛んになって来たのです。それから、少しして、ロシアのデニソワという凍結洞窟で発見された、古代人類のDNAも私たちの中に見出されるというのです。現代人と言っても人種や分布によって、含まれている古代人のDNAの率は変わりますが、概ね、2〜4%前後が多いのだそうです。あなたの先祖は、3%の確率で、ネアンデルタール人ですなんて、ふざけても、言ってはいけませんかね。私の高校時代の先生に、ピテカンというあだ名の先生がいました。ピテカントロプス・エレックスという古代人類の挿絵にそっくりだったのです。みんな陰ではピテカンと呼んでいましたが、本人の前では絶対に言えないことでした。

さて、聖書に記されていることは、間違いのない神のみ言葉であると信じておられる、多くのまじめなクリスチャンたちには、ちょっと理解しにくいことかもしれませんので、説明いたしましょう。たしかに聖書は霊感を受けているものであって、間違いは記されていません。しかしそれは、現代の科学的目で見て、事実と異なっていないということではありません。つまり事実ではないことも含まれているということです。

ちょっと考えてみてください。創世記が書かれたのは今から3千数百年も前のことです。読者と想定された人たちは、現代科学とはかけ離れた生活をしていましたし、現代科学の知識も持っていませんでした。ですから、聖書は彼らの一般常識でも理解できるように、事実が物語り化されて書かれているのです。また聖書という書物は、神の人類に対する救いの計画と、その計画の執行、あるいは遂行について記されたものです。ですから、その目的と関係のない事柄については、基本的に触れていないのです。

天地創造の期間が、僅か6日間となっているのも、年月の長さなどは救いの歴史にあまり関りがなく、当時の人々には勿論のこと、現代人に対してでさえ、省いても大した問題ではないのです。ですから、人の救いには関わりのなかった、アンモナイトも、恐竜も、マンモスの話しも出てきません。ビッグ・バンの話しも、ブラック・マターのことも、宇宙の広さについての議論も出てきません。当時の人たちには関心のない事柄であり、まったく説明の必要がないことだったのです。

人間の救いのことを語ろうとしておられる神様にとっても、そんなわき道にそれて、道草を喰っている暇もなかったわけです。従って、生物が誕生してから人類の発祥に至るまでの長い期間には、一般の生物学では、人類と呼ばれる動物たちも沢山いたわけですが、そのようなものも、神様の姿に似せて造られたホモサピエンスの救いには、関りがなかったために、聖書には登場して来ないのです。

ところが、創世記6章には、ノアの大洪水への導入のような出来事に、そのホモサピエンス以外の人類らしい、生物の記述が出てくるのです。それが「人の娘」です。断定的なことは一切言えません。聖書にはそのような理解を支える記述が、一切ないのですから神学にはなりません。。でも人間は神に似て創造できる動物です。創造は想像に始まり、想像は空想の発展です。面白い遊びが出来るのです。

現在ではゲノム解読の技術も発達し、核の解析によって、30億のDNAの繋がりがわかるようになっているそうです。ものすごい数です。人間の繋がりのかなり細かいことまでわかります。古代人の眼の色、髪の色、肌の色までわかります。非常に細かな知識が得られます。さらに新しい知識が増えることによって、古代人類の分布やホモサピエンスの、かなり詳しく正確な足跡も辿ることができるようになり、様々な発見につながって行くことでしょう。すると、空想の散歩がぐっと広がります。

さて、神の子と呼ばれるホモサピエンス、つまり、神が救いの計画を立て、救いのために働いてくださっていた人類に、人の娘の血、すなわち、神が救いの計画に入れていなかった古代人類の血が混じったのです。ここに、大きな問題が起こりました。もちろん、神にとってこの問題の勃発は、びっくり仰天するような突然の出来事ではありませんでした。全知全能の神にとって、知らなかったということはないのです。神はこれが起こるということは、予めご存知でした。しかし、神のことを語る時には、聖書は常に、神を人間の次元に引き下ろして語ります。そうしなければ語り様がなく、理解の糸口さえなかったのです。子供の絵本ではよく擬人化が行われます。お魚さんがお話したり、猫さんが人間のように理屈をこねたりするのです。神様の場合は、あまりにも高くいらっしゃるために、擬人化して、人間の次元まで降りて頂いて語られているのです。

神様の救いのご計画、キリストの贖いの御業による無代価の救いの計画に入れられていた人間に、その救いのご計画には入れられていなかった古代人が、不可分な形で紛れ込んでしまったのです。種と言うものの厳格な分類は、いまだに確立されていません。同じ種か、異なった種かという見極めが難しいのです。同じ種の場合は、子孫が出来ます。異なった種の場合は、普通、子孫が出来ません。ところが異なった種であっても、極めて類似した種、近隣種の場合は子供が出来る場合があります。

例えばライオンとヒョウを交配させるとレオポンが出来るそうです。馬とロバを掛け合わせるとラバが出来ます。台湾猿と日本猿は別種と考えられていますが、子孫を残すことが出来、その子孫も子を残すことが出来るそうです。最近のことですが、私は「キンダイ」という魚の刺身を幾度か食べたことがあります。とてもおいしい刺身です。真鯛のようなコリコリとした噛み応えはなくても、しっかりとした歯ざわりがあり、しっとりと滑らかであり、深

みのある味もあり、たちまち好きになりました。しかも安いのです。売られていた刺身の表示を見て、キンダイと記されていたので、そんな魚は存在しないと近くにいた店員に尋ねてみると、すぐにスマホで検索してくれました。すると、近畿大学が真鯛と黒鯛を交配させて作ったタイと出ていて、なるほどと感心しました。またも、近代のお手柄です。真鯛と黒鯛は産卵時期が異なっているため、自然では絶対にできない魚です。

ところが先ほどネットで改めて調べてみると、キンダイは石鯛と石垣鯛の交配だそうで、なるほどと思いました。あの味は真鯛や黒鯛よりも、石鯛や石垣鯛に近いと思ったものです。いつも大量の魚を釣って、「魚釣りの神様」を自認している私の評価です（極めて日本的な表現）。これがそのまま子孫を残すことができれば、言うことなしですが・・・・。

とんでもない脱線をしましたが、創世記６章の神の子と人の娘の雑婚でできた子は、子孫を残すことが出来ています。それは、生物学的には非常に近い種ということになります。ところがやはり、相当無理があったのか、雑婚でできた子供はネフィリムと呼ばれ、戦いに強い巨人であったと言われる様な、肉体的特徴を持っていました。

牧師は DNA の調査などが行われる前から、ネアンデルタール人との接触の可能性を空想していましたから、それこそ「ヤッター！」と喝采したのです。現代人の先祖は、だいたい６～７万年前にアフリカで発生したと、現代の人類学では考えられています。３０万年とか１００万年という人もいます。そのころ、ネアンデルタール人はまだ生存していたのです。そこで私は、想像を膨らませていたわけです。つまり、創世記６章に対して第三の見解を想像していたのわけです。ただ、テニソワ人の遺跡の発見は随分最近の出来事で、当時の牧師の思想的彷徨には含まれていませんでしたが・・・。現代の人類と、ネアンデルタール人やデニソワ人は、生物学的には、ライオンとヒョウや、馬とロバよりも類似していたのでしょう。ライオンとヒョウの間にも、馬とロバとの間にも子はできますが、その子たちは普通不稔性と言われて、子が出来ないのです。ところが、ネアンデルタール人やテニソワ人との間には子が出来て、しかもその子たちもさらに子を造ることが出来たのです。しかし創世記の記述によると、神の子たちと人の娘たちの子孫である、ネフィリムたちには明らかな身体的異常性が見られたのです。そしてどうやらその雑婚が「神様を後悔させる」こととなり、人類の消滅につながったのだと思われるのです。そう考えると、つじつまが合うのです。

神様は現代の私たちが属する人類、ホモサピエンスという種を、特別に神様に似せてお造りになったのです。しかし、ネアンデルタール人などの古代人類には、その特殊性をお与えになっていません。姿形はホモサピエンスにかなりよく似ていても、神様の姿には

似ていなかったのです。人類が罪を犯したにもかかわらず、その人類を愛し続け、救ってやろうとされた神の思いと計画は、神様の姿に似せて造られた、ホモサピエンスに限られていたのです。ところがそこに古代人類との雑婚が起きてしまい、神様の救いのご計画に、巨大な支障がでてきたのです。もちろん、これは神様が知らないところで、突然起こって神様を慌てさせたのではありません。神様は全知全能のお方ですから、このようなことが起こるのは、当初からご存知でした。ただ、聖書は、必ずこの無限で、全知全能の神を擬人化して、つまり人間に分かりやすいように、人間のレベルまで引き下ろして表現していますので、あたかも神様が知らないうちに起こって、神様を慌てさせたかのように記しているのです。

そしてこれは、本当に大変な出来事でした。本来、永遠の命を約束していない、救いを約束していない者たちにまで、救いが及ぶ事にもなりかねないのです。あるいはまったく逆に、人類すべてが救いを失ってしまう危険性があったのです。そこで、神様がお取りになった処置が、人類を滅ぼしてしまうことでした。ある人がこの頃の人類の数、総人口を計算して、1億人に及んだのではないかと、書いているのを読んだ事がありますが、聖書がいう年数や年代も、昔の人たち、つまり、聖書が書かれた時代の読者たちにわかりやすいように、非常に短く、実際よりは極端なほど、短くされていますので、それを考慮すると、そして人類の増殖のスピードから判断するともっと多かったと考えても、良いほどです。ただ、古代人類との雑婚の結果、肉体的にも異変が起きていますので、全体に短命になっていることも考えられます。いずれにしても、現代の80億人よりはかなり少ない数です。当時の人々の生産性を考えると、地球が支えられた人口は、意外に少なかったと思われるのです。

とにかく、この雑婚によって生じた混乱によって、神様の姿に似せて造られた人間が、神様の姿ではなくなってしまったということだったのかもしれません。あるいは失ってしまう可能性が非常に高かったのかもしれません。そこで、神様は彼らの中にわずかだけ残った、心身ともに正常なホモ・サピエンスの姿を留めている、ノアとその家族だけを残して、他の者すべてを滅ぼしてしまわれたと考えられるのです。ただ神様は無残にも、あるいは残酷にも、彼らを警告なしに滅ぼされたのではありません。むしろ、充分な警告を与えて悔い改めの機会を提供した上で滅ぼされたのです。しかし、生き残ったノアとその家族には、ネアンデルタール人や、デニソワ人の雑婚の形跡は残りました。それが現代人のDNAにも現れているのです。

たとえば民数記13章にわずかに触れられている巨人たちが、イスラエルのスパイたちの言い草によると、ネフィリムであったということですが、果たしてこれが本当にネフィリムであったかは、断言できません、残念ながら牧師には生物学も、デノム解析もまったく畑

違いで、いまも聞き覚えで書いているに過ぎませんので、果たしてこれが本当にネフィリムであったかどうかは、判断できません。ここでネフィリムがいたというのは、神様がおっしゃっているのではなく、スパイたちが言っているのですから、本当かどうかは全く分からないのです。むしろネフィリムの言い伝えが、ノアの家族から伝えられて、長く残っていて、それがスパイたちの言葉となって出てきたと考えるのが、妥当だと思われます。

でも、ネフィリムであった可能性も、まったくは否定できません。遺伝というものは、時としてとんでもなく年月が重ねられ、全く関りがないと思われるところに、突然、顕著な形で現れるからです。イスラエル軍がサウロ王のもとでペリシテ人と争ったとき、非常に大きなペリシテ人たちの一団と戦ったことがありました。その中でも特に、軍人として秀でていたのが有名なゴリアテですが、彼もネフィリムの形質を受け継いでいて、あのようになったのかもしれません。むしろ、私がデノム研究をしている学者さんに、尋ねてみたいと思っています。

面白いでしょう？神学的散歩は。しかしこれは神学ではありません。神学に似た、神学的散歩にすぎず、神学に到達していないないのです。しかしこのような散歩が、思わぬところで神学に発展する可能性もあるのです。でも、今のこの話が神学に発展する可能性はありません。なぜなら、神学にするには、聖書の記述、聖書的サポートがあまりにも、決定的に、少ないからです。でも、この神の子たちと、人の娘たちの雑婚が、ノアの洪水の直接的な原因となったことが、容易に推測されます。

そうすると、聖書にはもう一つ、ネフィリムに関する記述があることがわかります。それは良く、ユニバーサリストに引用される、新約聖書のペテロ第一の手紙3章18から20節に記されている言葉です。（神学の世界で、ユニバーサリストとは、神様は愛のお方であるから、人類を滅ぼしてしまわれることなどはあり得ない。結局最後は、何らかの方法で全ての人に救いを与えて下さるのだと考える人たちのことです。エホバの証人に属する人たちは、そこに入りそうですし、真面目なクリスチャンたちの中にも、有名な牧師の中にも、その方向に走ってしまう人たちがいます。）

私はユニバーサリストではありません。しかしキリストを信じなかった人はみな地獄に落とされ、永遠に火に焼かれて苦しむというような、西欧福音派の教えも信じていません。聖書はそのようには教えていないからです。むしろ、一人一人の人間は、すべて神の御前に出て、その行いに応じた報いを受けことになるのです。ただ、神に信頼した人たちは、キリストの身代わりの死の功績の故に、キリストによる救いを頂いて、この裁きからは除外されるのです。つまり滅ぼされる裁きの場にでる必用はなく、救われて命を与えられ、一人一人がぞれぞれの行いに応じて裁かれ、どのような喜ばしい報いが与えられるべきか

が決定される、裁きの場を信じています。

そういうわけですから私は、キリストが、ノアの箱舟の洪水で滅ぼされた者たちが、捕らわれているところまで行って、み言葉をお語りになったということを、死後にも救いのチャンスがあると主張する人たちには同調いたしません。ただ、私が先に語って来た神学的遊びを継続すると、また面白い想像を続けることが出来ます。聖書には神学的考察をするだけの、充分な記述がないのですから、想像することしかできません。繰り返しますが、それは神学ではないのです。死後にも救われるチャンスがある、セカンド・チャンスがあるのだと、このペテロの言うことをもって主張することには、それを支える聖書的記述が弱すぎて、単なる希望的空想に過ぎないのです。

キリストがノアの大洪水で滅ぼされ、捕われている人たちの所に行って、み言葉をお語りになったというのを、彼らに救いの可能性を語られたと理解するのも、空想に過ぎません。語られたのはみ言葉であって、福音だと断定はできないのです。私はノアの時の警告を信じられないで滅ぼされた人たちには、まだまだ自分たちに起こった出来事について、理解が不足していただろうから、人類と、人類に似た種類の動物との雑婚について、理解できる人々には理解できるように、お話になったのではないかなと想像します。ひとの娘たちの形質を強く受け継いでいた者たちは、理解できなかったことでしょう。ネアンデルタール人の脳は、ホモ・サピエンスの脳に比べると非常い未発達で、理解力には大きな差があったと思われるからです。「神の子」たちの形質を強く受け継いでいた者たちは、キリストの説明を受けると理解できたものと考えられます。これは、神様の聖さから出てくる正義に基づいた、「公平なお取り扱い」の行動だったのだと思います。

このことを延長して想像を発展させると、石器時代の日本人、弥生時代の日本人、それからずっと福音を聴く機会がないまま、一所懸命に生きたにも拘わらず、救いに与ることが出来なかった人たちの所にも、イエス様は行って、説明をして下さるのかな・・・・・・日本人だけでなく、一所懸命に、自分に与えられた心の律法に従って生きた、すべての人々の所に、イエス様は行って、神様の正義にそって、お話してくださるのかな、などと考えるのです。

でも、私は神学にならない想像は、あくまでも想像に留めるべきだと考えています。たとえここでこのように書き記しても、これは、信じるべきことではないと、警告しておきます。ただ、想像の自由はあり、その想像の散歩を少し楽しむ自由もあるのです。それは神学的思考を育てるにも、役立つこともあるのです。

ついでに、聖書の記述の理解について、もう一つ、重要なことをお話したいと思います。

それは、聖書に記された神の御心や行動には、必然的に、人間にはわからない事柄がたくさん含まれるということです。私たち人間の小さな、有限の頭で、どうして、無限の神のお考えや行動を理解することが出来るでしょう。また、神が直接人間に語りかけてくださったとしても、その語りかけには、これまた必然的に欠陥が伴うことです。なぜなら神は、言葉をもって人間にお語りになるとき、人間の言葉を用いなければならないからです。たとえば、創世記の第一章の天地創造の物語を啓示してくださった時、神は語りかける相手の人間に、理解できる言葉を語らなければなりませんでした。創世記の場合はヘブル語です。当時のヘブル語は未発達で、現代日本語のように込み入った内容を表現することはできませんでした。またたとえ神が最高のヘブル語を用い、美しくまた正確に語ったとしても、理解する人間の言語能力が低ければ、神の努力は報われません。せめてそのようなことを理解して、限られた聖書の記述を、より良く理解できるように、想像力を得るために想像力をたくましくし、あくまでも聖書が語っていることを理解するように努力しましょう。語っていない部分は、しっかりと語っていないものとして、残す勇気を持ちましょう。そうすれば、セカンド・チャンスの誘惑に陥ることもありません。しかしそこに想像力を加えておきましょう。科学の発展や神学の成熟度が増すと、それまでは見つかっていなかった、ミッシングリンクが姿を現すこともあるのです。

ちなみに、ホモサピセンスがネアンデルタール人と遭遇し、雑婚が行われていたのは、およそ4万5千年から4万年前のことだったろうと、現代の人類学では想定しています。日本列島に・・・・・列島ではなかったかも言しれない日本の領土・・・・日本という国家が成立されていない時だったから、領土とは言えない・・・・・ああ、面倒くさい。正確に書こうとすると、面倒なのです。だから聖書は、面倒なことは大胆に省いて、記述しているのです。現代は日本の国土とされている土地に、人類が住み始める、少し前のことだったようです。